

## 小林浩之様を偲んで

小林浩之様が1月7日に亡くられました。享年81歳でした。奥様によると、当日はお昼に初粥を食べられ、普段通りの夕食を済ませて自室で休まれていた処、ご家族が異常に気付かれたとのことでした。謹んで冥福をお祈りいたします。合掌。

小林様は、SCE・Net 創設間もない時期に会に加わり、持ち前の明るさと説得力を発揮されて会の発展に大きな足跡を残されました。本音の話し合いを通じて多くの方々に思い出を残されたことと思います。皆様の思い出を留めておくことが供養になるかと思い、何人かの方に追悼文の執筆をお願いいたしました。

(2024.2月 中尾記)

### <小林様の略歴>

- ・1942 誕生
  - ・1960 福岡県嘉穂高校出身
  - ・1966 東京大学工学研究科修士課程(化学工学)修了
  - ・1966 三菱化成・黒崎工場・EP開発部
  - ・1969 水島工場・樹脂技術部／製造部／管理部
  - ・1983 本社樹脂事業部
  - ・1992 水島工場・製造部兼樹脂開発センター
  - ・1995 三菱化学・四日市事業所・ポリオレフィン技術開発
  - ・1997 水島事業所・技術開発センター
  - ・2001 A&Mスチレン
  - ・2003 PSジャパン
- 
- ・2004 SCE・Net 入会
  - ・2011 知の市場 化学技術特論講師(ポリエチレン・ポリプロピレン)
  - ・2012 SCE・Net 代表幹事

(小林様のご講演での自己紹介より)

## 小林浩之さんを偲ぶ一再び巡り合った学友

牛山 啓

新年の松も明けたばかりの8日激震が走った。大学の学科同期からの知らせで、小林さんが亡くなったのを知った。同期では最も若手であった彼が、パーキンソン病で1年ちょっと前から療養中であつたとはいえ、こんなにも早く天国に行くとは思ってもみず、誠に残念と言うほか無い。年賀状ではまだまだ生きることへの執念がみられたのに。

彼とは、大学修士修了後に就職した先が会社は違えども場所は同じ北九州で、最初の頃、彼の寮に転がり込んだり、新婚の我が家にやってきましたりしたもので、家内は未だに同期で一番のハンサムと言ったのに驚いたものである。おそらく彼の言動が女性の感性にフィットしていたのであろう。その後は勤務場所も別れ、お互い年賀状のやりとりだけであつたが、再び彼との交流が始まったのは、お互い会社をリタイアしかかった頃、たまたまポリスチレン事業に関係があつた彼を含む同期3人が事業の将来を語ろうと言う名目で、月に1回ほど東京駅近くで飲み会を始めたことによる。やがて、それが月例の同期会に発展する。同期会では、折角日本の成長期にそれぞれ何らかの役割を担った我々の経験を、後輩たちに残し伝えて行こうと、彼や澁谷さん(同じ大学同期)が音頭を取って技術会を立上げ、各企業へのプレゼンテーションを行ない、最後に皆の経験をまとめ「僕らの生きてきた時代」として自費出版した。彼の記した序文やまとめを読み返して見ると、その流麗な文章とともに彼の思想や生き様が垣間見られて嬉しい。

その技術会解散会の際、澁谷さんのやや強引とも言える勧誘にあつて、小生も SCE・Net に参加するようになったが、小林さんは既に前から SCE・Net 会員であつた。同じ安全研究会で活動を続ける一方、公開講座(知の市場)の講師をし、教育研究会にも参加して、非常に熱心な活動を続けていた。その後澁谷さんと共に小林さん、小生の3人共幹事会に参加するようになったが、忘れようもない2011年には澁谷さんが代表幹事をされ、小生は副代表で事務局を担当していた。小林さんはおそらく、化学工学自体への彼の思い入れが多分にあつたものと思われるが、幹事として SCE・Net の運営にいろいろ辛口の提言をされていて、それへの対応がなかなか進まず、かなりご不満であつたろうと思われる。そのような矢先、澁谷代表が急病で長期間入院され、急遽小生が代役をしていた。当時、最大の懸念事項は化学工学会との関係で、どちらかと言えば SCE・Net はお荷物とみられていたようだ。しかし、シニアの活動も無視はできないまでに SCE・Net も成長しており、その関係修復が急務であつた。 たまたま小林さんは当時の化学工学会事務局長と同じ会社の出身で、話が通じやすいだろうとの期待もあり、ここは是非小林さんをお願いしたいと、澁谷さんや諸先輩方の了解を取り付けた。

期待に違わず、小林代表は精力的に化学工学会との連携を進めた。まず、関東支部および産官学連携センター内の開発型企業の会とのセミナーについて、SCE・Net の技術懇談会と相互乗り入れをすることとし、ネックとなる会費はシニア会員並の費用として参加しやすくした。次に、化学工学会の SCE・Net に関係ある情報を共有化するため、化学工学会事務局の担当者が SCE・Net の幹事会に出席し報告してもらうことになった。化学工学会の中で SCE・Net の活動を知らせ、その知名度を上げることが必要で、それが翻って活動成果を上げ会員確保につながるとして、化学工学会誌に定期的に各研究会などの活動状況を掲載するコーナーを確保して頂いた。等々の改革がなされ、化学工学会との連携を確たるものにし、SCE・Net の会員増加にもつながり、現在の活動基盤を充実できたのには彼の尽力に負うところが大きい。

小林さんはお子さんにも恵まれ、葬儀で多くのお子さんお孫さんに囲まれ嬉しそうに微笑む写真を拝見し、過ごしてきた暖かい家庭の姿をうかがうことができた。ただ、晩年の写真では体が傾き、つらそうな姿もあり、病魔による苦痛は予想外に大きなものであったろう。これからは全ての現世の苦痛を忘れ、天国から安らかに皆を見守っていて頂きたい。心からご冥福をお祈りします。

合掌。

## 小林さんの思い出—代表幹事を引き継いで

川瀬 健雄

10年以上前の事です。SCE・Netという化学工学OBの集まりがあると聞き、その講演会で小林さんとお会いしました。親分肌の豪快な方、というのが第一印象。幹事会に参加してからは小林さんの指導力、説得力に驚かされました。当時、SCE・Netが設立され10年、設立時のリード役の方からの代替わりの時、会の基盤と方向性をもう一度確立する事に小林さんがご尽力された、そのリーダーシップと行動力を持っていた人だったと今思っています。学会へのシニア会員制度の導入を後押しし、いち早くシニア会員のOB会への取り込みの道をつけられたこと、学会の援助なしに続けにくいOB会活動を、援助を受けつつ独立性と学会に従属しない関係を保てるよう努力された事、これらは小林さんの個性なしには進められなかった事と思います。幹事会での厳しい態度、幹事会後の飲み会での気楽さ、が今でも懐かしく思い出されます。代表幹事を退かれた後、暫くは監査人として幹事会で時に厳しく、時に優しく、幹事会の方向性にも助言を続けられていました。まだまだお元気に活躍されると期待していたのですが、こんなに早くお亡くなりなるとは想像できませんでした。早すぎたご逝去、それでもやるべきことはその都度やり遂げられていたと思います。長い間ご指導いただき有難う御座いました。

## 小林浩之さんの事—神奈川研究会のことなど

持田典秋

小林さんが SCE・Net への入会は最初からではありませんが、度々見学会などで一緒になり、わりと親しくなりました。特に東北大震災の起こる前年、エネルギー研究会解散記念に3日間の東北地方を巡るエネルギー施設見学旅行に飛び入りで参加され、総勢9名で地熱発電、楊水力発電、地下石油備蓄などを見学し、最終日には翌年3月に被災地となった久慈から釜石まで津波に襲われた海岸線を大型タクシーでずっと走った記憶も鮮明に覚えています。

時には一緒にゴルフを楽しみ、特に岩村さん、高砂さんと一緒に千葉の勝浦までおいしい魚を食べたいとゴルフを出しに使って出かけたことも二度ばかりありました。

趣味である陶芸の発表があるというので、山手の方に行った記憶もあります。

誘って神奈川研究会に参加してもらいました。

小林さんと最後のお会いしたのは、2021年12月14日です。ちょうど神奈川研究会がかながわ県民センターで行われた日、発表者である小林さんが突然車椅子姿で現れ、ご自身の病気であるパーキンソン病について、「パーキンソン病の研究(その1)」として発表された日でした。その時の印象を私はこのように記していました。

『小林さんとは2020年2月にお会いして以来、2年近く経っての再会は衝撃的でした。当時全く予想もしていなかった姿には、ひどく驚かされましたし、心が痛みました。ご本人も青天の霹靂とおっしゃっていましたが、まさにその通りだと思います。病状がこんなに進行してしまったのは、コロナの影響が大きいのでしょうか。』

発表は病気の内容について、丁寧に説明されていましたが、わかり易く随分勉強になりました。根本的な治療法はないということですが、近ごろの医療の急速な進歩を考えると、遠くない時期に画期的な治療方法が開発されるような気がしますし、そう期待したいものです。』

小林さんの訃報を聞いたのは1月10日、猪股さんからのメールで知りました。

## 小林浩之様を偲んでー福島問題研究会活動での思い出

横堀 仁

年明け早々、能登半島、羽田空港と悲しい事態が続く中、小林浩之様ご逝去との残念な知らせを受けた。小林様とは、私が SCE・Net に入会して以来、今日まで 10 年間程の福島問題研究会を通じてお付き合いいただいた。研究会における小林様の活動に思いを巡らすことで故人の霊を偲びたい。

2014 年春に化学工学会内に「福島原発事故対策検討委員会」が設立され、SCE・Net からは小林様が委員として参加された。学会委員会に呼応して、小林様の声がけにより SCE・Net 内に福島問題研究会が設立された。現場をよく見て関係者の声を直接聞くことが重要とのご指摘を受け、研究会としては、2015 年以降、3 回に亘り福島原子力発電所を見学した。併せて、檜葉遠隔技術開発センターや廃炉環境国際共同センター並びに東電廃炉資料館や(株)ATOX の柏研究所などの 1F 事故関連施設を訪問した。また、原子力損害賠償・廃炉等支援機構(NDF)や技術研究組合国際廃炉研究開発機構(IRID)や東電川崎研究所、東京大学等の廃炉推進の関連機関を訪問して関係者との意見交換をおこなってきた。2015 年秋に静岡大学で開催された日本原子力学会(ポスト福島原発事故セッション)の会場で小林様をお見かけした。「化学プラントのトラブル対応で培われた化学工学技術者の能力を、1F 廃炉の現場でのプロジェクトマネジメントに活用すべし」との意見を堂々と述べられていたことが印象に残っている。

2020 年以降はコロナ禍対応として研究会のオンライン開催が定着することもあり、小林様と直接お目にかかる機会がなくなってしまった。そうこうするうちに体調を悪くされ研究会への参加もままならなくなっていた。福島問題の解決に関しては志半ばあったことを残念に思いつつ、心からご冥福をお祈り申し上げます。(合掌)

添付の写真は、「廃炉環境国際共同センター(富岡町)」訪問時(2019.5.20)の集合写真。

(2列目の左から3人目)



## 小林さんの思い出—シニア道の歩き方

中尾 眞

小林さんと初めてお会いしたのは、2011年のことだった。当時、教育研究会では山崎徹様主導で、「知の市場」の社会人向け公開講座に多くの方々関わっていた。「知の市場」には幾つかの講座があり、化学技術特論もその一つで、化学産業を支える15の工業プロセスについて経験者が解説するもので、小生は塩素・アルカリを、小林さんはポリオレフィンを担当した。小林さんは三菱化学でエチレン・プロピレンの製造部門を歩まれたので、この分野を担当されていたが、小林さんの講義は化学工学の有用性を確信し、プロジェクト・マネジメントの重要性を強調されていた。講座の在り方の議論については講師間で議論があったが、小林さんは講座はあくまで受講者に役立つべきものであり、教養のための講座とは一線を画すべきと主張されていたことを覚えている。

数年後代表幹事を務められた際、毎月開かれる幹事会のあと、近くの居酒屋で焼酎を飲みながらの議論は楽しただけでなく、本音の議論が問題解決に大事であることを教えてもらった。

シニア技術者の歩むべき道については、“シニアは何か社会貢献ができるはずであり、社会貢献を通じて自己発現につながる事が大事だ”と多くの場面で述べられていたが、以下の文章は**化学装置へ投稿された持論を述べられたものである**。小林さんの変わらぬメッセージとして無断で掲載させていただくことをお許しください。合掌。

### “シニア・ケミカルエンジニアが舞台に上がる時”

小林 浩之

高齢者には、体力、知力の限界も大きいことから所謂生産年齢層を、等価で置き換えることはありえないし、それどころか、高齢者は、生産年齢層の負担にならないというせめてもの努力も一層、求められている。加齢とともに当然能力も落ちる。だから、高齢者の力を最大限発揮させるためには、比較的若い人との連携が必須の条件である。比較的若い世代と連携もしながらも、自立し、社会に貢献し、自らの生きがいと気高さを担保できる環境と場を作り、提供することは社会の義務とも言えるし、私たちの目標でもある。

SCE・Netの活動は、少子高齢化時代に向けて学会が作る場の一つの始まりに過ぎない。これを超える、さらに広い活躍の場が展開されることを期待している。かつては組織として、それ以上に個人としても化学装置メーカーやエンジ会社が化学産業を育てる。その逆もあったように思う。これが「化学装置」のミッションの一つである。我々もその一翼を担いたい。

(2014年化学装置への投稿)